

西南学院の教育者群像

—「与える幸い」を継承した人たち—¹⁾

塩 野 和 夫

はじめに

1 なぜ、「西南学院の歴史」か

職員夏期修養会で講話の機会を2回与えられました。2回の講話で話す内容は、要するに「西南学院の歴史」です。もし、「なぜ西南学院の歴史なのか？」と尋ねられたならば、まず「人間には特殊なセンスがあります。歴史的センスです」と答えます。人間には過去と現在、それに未来を繋いで考える能力があります。だから、過去を深く学ぶことによって現在を理解し、未来でさえも形成していくことができる。しかも、未来を創造していると自覚できる時に、私たちは「今何かを作りつつあるんだ」と充実感に満たされて生きることになる。このように過去・現在・未来を繋ぎ、しかも歴史的な今を豊かに生きるところに歴史的センスは働いています。

ところで、学生たちに常日頃「将来、君たちが働くことの意味を今からよくよく考えておくように！」と訴えています。なぜならば、仕事というものは一つには量的な事実として与えられている能力と知恵と時間の殆ど全てを要求するからです。そこでもし、ほとんど全ての持てるものを注ぐ仕事に納得できない、意味を見いだすことができなかつたとしたら、そこには量的事実から質的

1) 本稿は西南学院職員夏期修養会（1997年7月23～24日）における2回の講演を論文として整えたものである。そこで、講演会の雰囲気伝えるために語りかけ口調や話題を残している。

問題への転化が起こっています。即ちそのような仕事においては人生そのものが虚しくなってしまうている。働くことに意味を見いだせない人生は虚しいと言わなければならないからです。だから学生諸君には「今から働くことに何の意味を求めるのか、よくよく考えておくように！」と勤めている訳です。

同じことが西南学院に勤めておられる皆さんにも言えます。西南学院で働いている日常生活に深い所での意味、あるいは仕事そのものに対する納得、もしそのようなものを見いだせていないとすれば、皆さんは虚しく日々を過ごしておられると言わなければならない。誠に残念な事実です。

そこで今回、職員夏期修養会で「西南学院の歴史を学ぶ」作業を通して、何よりも西南学院で働く意味を探し求めたいのです。講演では具体的には「西南学院の81年に及ぶ教育の歴史を学ぶ」のですが、それは歴史から現在の教育現場に繋がってくるのは何かという問いを含んでいます。あるいは、このように言うこともできます。私たちは西南学院で働いて何かを生み出しています。そこで「教育現場で何かを生み出すために、大切な時間と労力と様々なものを費やしても惜しくない！」真実があるとすれば、それは一体何なのか。このような何かを一緒に探し求め、納得のいく仕事の現場を創りあげていきたいと願っています。

2 「教育者群像」とは何か

次に「教育者群像」について考えます。というのは「西南学院の歴史を学ぶ」手がかりとして、「教育者群像」という概念を考えてみたからです。そこで、「教育者群像」とは一体何なのか。『広辞苑』第6版（2008年）で「群像」を引いてみますと、「絵画・彫刻などで、1つの主題のもとに多くの人物を集団として表現したもの」とあります。つまり、多くの人物の集合的構成が「群像」です。そうだとしたら、教育現場における「群像」は何を意味するのでしょうか。

シート先生²⁾が「好きだ！」と言っておられたすき焼きを例に取り上げて考えてみました。私もすき焼きは大好きですがけれども、私の流儀はまず肉を焼き、次いで野菜と豆腐、それからこんやくや色々な具材を入れて、その後に

出し汁を注ぎます。そうしますと、さまざまな食材がそれぞれの味を出してきます。それぞれの味を出しながら、しかも全体としての味が整ってきた時に、それがすき焼きのおいしさになると思います。つまり、全体としての味を持ちながら、しかも一つ一つの食材はそれぞれの味を保っている。

西南学院という教育現場についても同じことが言えると考えます。学院には様々な個性を持った教職員がおられますが、教育現場は一人で成り立っているわけではありません。職員だけあるいは教員だけで、教育活動ができるものでもありません。職員と教員が建学の精神、それはすき焼きでいえば出し汁とあって良いかと思いますが、そういった共通の理念を基にして全体としてのまとまりを保ちつつ個性ある教育現場を創りだしていく。西南学院の歴史を調べてみますと、西南学院の「教育者群像」という概念を使うことのできる、全体としてまとまりと個性のある教育現場を各時期に創っていたことが分かります。そこで、第一回目の講演では「教育者群像」を手がかりとして、全体としてまとまりのある西南学院の教育活動は何であったのか。学院の各時期において、それはどのような姿をとり展開してきたのか。そういった全体像をご一緒に考えたいわけです。

3 「与える幸い」とは何か

「はじめに」で「教育者群像」と並んで取り上げたいのは、「与える幸い」という考え方です。「与える幸い」については、使徒言行録第20章35節でパウロがこのように語っています。

あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が「受けるよりは与える方が幸いである」と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。

2) シート先生 (Leroy K. Seat 1938-) 1968 (昭和 43) 年に西南学院大学に就任し、1996 (平成 8) 年より 2004 (平成 16) 年まで西南学院院長を務めた。その間に、建学の精神を 4 つの L で始まる文字、Life (生命)、Light (光明)、Love (聖愛)、Liberty (自由) で表現することを提唱した。

その時、パウロはエルサレムを目指す旅の途上にありました。ところで、エルサレムでは誰がパウロを待っていたかという、彼を捕らえようとする人々でした。したがって、小アジア南西岸にあるミレトス（トルコ名 バラト）で懐かしい人々に向けて語ったパウロの説教、それは彼の訣別説教となります。この別れの説教の結びで「受けるよりは与える方が幸いである」と言われたイエスの言葉を人々に示しています。実はパウロはこの言葉によってイエスの生と死の全体を表現しています。「与える幸い」とは、それほど含蓄の深い言葉なのです。

パウロが語った「与える幸い」という言葉を、講演では繰り返しキリスト教教育の本質として語りたいと考えています。何故そのように語ることができるのか。理由の一つは、イエス自身の生涯をたった一言で表した「与える幸い」という言葉、その概念は含蓄が深く豊かであるために、キリスト教教育の本質とすることが可能であるからです。もう一つは「与える幸い」という概念から考えると、西南学院の教育現場をよく検証できます。すなわち、「西南学院は何を与えてきたのか」、あるいは「何を与えようとしてきたのか」、そういった観点から各時期の西南学院の教育を具体的に検討することができます。

第1部 西南学院の教育者群像とその時期

第1章 各時期における教育者群像のモデル作成

— 教育者群像と「与える幸い」の継承を中心として —

本論に入ります。まず、「第1章 各時期における教育者群像のモデル作成 — 教育者群像と『与える幸い』の継承を中心として —」です。西南学院の歴史は81年に及びます。もちろんこの81年間を貫く西南学院の精神性や教育現場の特色を指摘することはできます。できますけれども、歴史的に見ますと時代と共に現場を担った教育者は変わりました。教育環境も甚だしく変化しました。あるいはキリスト教の教育精神を学生・生徒に伝える表現や方法も変わりました。このように変化した現実に対応して考えるためには、学院史を幾つかの時期に区分しなければなりません。幾つかの時期に分けた上で、それぞれの時期に特有の教育者群像について検討することが必要です。

第1節 モデル仮説1 — 時期 —

まず時期区分の検討です。様々な検討を重ねた結果、西南学院の時期（仮説）を考えてみました。以下の通りです。

西南学院史の時期（仮説）³⁾

- 第1期 創設期 1916（大正5）年から1945（昭和20）年
- 第2期 継承期 1946（昭和21）年から1970（昭和45）年
- 第3期 展開期 1971（昭和46）年から現在（1997〔平成9〕年）
- 第4期 近未来

3) 時期区分という作業を進める上で、「資料1 年表」を作成した。ところが、資料1は紛失してしまい、見つけることができない。ただし、本稿では随所に資料1に基づいた論述があり、それを引用していると思われる記述もある。資料1の復元はできないが、それを知るためにも関係した引用などはなるべくそのままの形で使用した。

おそらくこれから5年から10年経つと、近未来という時期に入っていきます。その時期をイメージし、準備して進めていくことに私たちは責任を負っています。

それぞれの時期について簡単に見ておきます。「第1期 創設期」は1916年から1945年です。この時期に私立西南学院は男子中学校を1916年に設立し、男子の中学部と高等学部それに商業学校からなる学院に発展させます。今から見ると小規模の学校ですが、その当時にすれば福岡市においてそれなりの規模を持った学校でした。この時期に西南学院は日曜日問題を経験します。それから戦時体制下でキリスト教系学校であるために大変な苦しみを味わいます。これが第1期です。

「第2期 継承期」は1946年から1970年です。1945年の敗戦を契機として、西南学院は着実な再建を進めることとなります。再建を進める中で、建学の理念が確認されます。たとえば、1950（昭和25）年に「C.K. ドージャー記念日」と「波多野培根先生記念日」が学年歴に入れられる。それは西南学院が拠って立つ立場は何であるのか、あるいは学院が大切にしなければならないこととは一体何であるのか。それらを確認して学年歴などで自覚し、さらに内外に公に示す。そういった営みであったわけです。第2期にはまた中学校・高等学校が開設され、舞鶴幼稚園・早緑子供の園も西南学院の組織に入りました。さらに西南学院大学が開設され、大学の学部学科が次々と増設されています。しかし、この時期の最後の5年間程は学園紛争が起こり、キリスト教教育をめぐる学院は苦しむこととなります。

「第3期 展開期」は1971年から現在にしていますけれど、学園紛争の終結からしますと、もう少し開始の年は遅くなります。それでも1971年から第3期としたのは、1971年に大学院が開設されています。大学の国際交流制度が実施されたのも1971年です。このように大学院や国際交流制度、そういうものが実施されて西南学院が充実していく。これが第3期の大きな特徴であろうと考えるからです。

このような歴史的歩みの上に、おそらく近い将来百道浜校地に校舎が建てら

れる。その頃から「第4期 近未来」に入っていくのではないかとされます。その時には、現在とは何か違った西南学院の姿が次第に現れてくるでしょう。やがてくっきりと現れてくるだろう新しい西南学院に一体どういう内容を注いでいくのか。それは現在を担っている私たちの責任にかかっています。

第2節 モデル仮説2 — 教育者群像 —

次に、「モデル仮説2 教育者群像」についてです。「教育者群像」の概念についてはすでに検討した通りです。その上で、西南学院の時期を「第1期 創設期」「第2期 継承期」「第3期 展開期」「第4期 近未来」と区分しました。そうすると、それぞれの時期にどういう「教育者群像」が存在していたのか、存在するののかという検討が必要になります。各時期にはもちろんさまざまな個性をもった教職員がいるわけですが、しかし西南学院全体としてはどうであったか。各時期の教育者群像にどういう特色があったのか、そういった事柄を考えます。

第3節 モデル仮説3 — 教育における受容と継承 —

第3に「モデル仮説3 教育における受容と継承」です。今回もう一つ大切な事として考えたい内容は、教育における受容と継承です。この課題は一人の教育者について考えてみると分かりやすいと思います。ある人が教育者として教えている場合に、その人にはまず教えられたという経験があって、それを踏まえて教えている訳です。教えられた経験に基く教育の受容と、教えることによって次の世代に教育を委ねて継承させていくという循環があります。一人の教育者における教育の受容と継承という循環は、西南学院にとっても言えます。先程はすき焼きを例にして言ったのですが、西南学院に存在する教育の精神は教えることによって次の世代に受容される。すると、受容された教育の精神はその時代の学生や教職員に共有されて、次の世代に継承されていく。このようにさまざまな時代を貫いて西南学院の教育精神は受容と継承、受容と継承を重ねて伝えられていく。ここに西南学院の命の姿を見ることができると思います。

このようにして継承されていった教育の精神の姿を第2部では個々人の教育者において見ます。第1部ではそれが西南学院全体としてどのように受容され、どのように継承されていったのかを、皆さんと一緒に考えたいのです。

第2章 創設期の教育者群像

そこで、「第1期 創設期の教育者群像」を考えます。ここで課題になるのは、「第1期 創設期（1916-1945）」は西南学院にとってどういう時期であったのか。どういう人たちがこの時期の西南学院を担い、そこにどういふ教育上の特色を見いだすことができるのか、といった問題です。

第1節 創設期はどのような時期であったか

「第1期 創設期」について、3つのポイントからその当時に概観できると考えます。一つは学校の設立・開設・改称といった事柄です。私立西南学院は1916（大正5）年に男子中学校を設立し、1921（大正10）年には高等学部を設け、1939（昭和4）年には商業学校を開設しました。第1期にはこのようにして順次学院の規模を拡大しています。これが第一のポイントです。第2は西南学院にとって重要な意味をもつことになる日曜日問題です。日曜日問題をめぐって1928（昭和3）年2月に高等学部の全学ストライキが起きました。不首尾に終わった解決策の責任をとって同年8月に杉本勝次たちは退職します⁴⁾。新たな解決策を求めて1929（昭和4）年12月に組織された「日曜日委員会」といふ教育現場を担っていた人たちの答申が1930（昭和5）年5月に出されます。他方、ミッション会議の意見書が同年11月に出される。ところが、両者の内容が微妙に違っていたわけです。理事会はミッション会議の意見を採用了。それが一体何を意味していたのかは、後でもう少し詳しく検討します。第3のポイント、それは戦時体制下においてキリスト教系学校であったために生じた

4) 参照、西南学院学院史企画委員会『西南学院七十年史 上巻』606頁

一連の出来事と、そこで苦悩した西南学院の姿です。これも「第1期 創設期」における出来事です。

第1期における出来事から二つを取り上げて紹介します。その一つが全学的に日曜日問題の解決を目指した取り組みです。要点だけを資料を中心に見ておきます。「資料2 日曜日委員会の設置と答申」⁵⁾の608頁終わり3行目から見て下さい。理事会が日曜日委員会を作ったのですが、どういう人たちによってこの組織は構成されていたのかが書いてあります。

第二 理事会は、西暦1930（昭和5）年の1年間、次の委員会組織を望む。委員は、学友会若くは学友会各部より提出せらるる、主の日遯守に関連せる総ての問題解決に当られんことを望む。

- (a) 福岡市在住理事 2名
- (b) 各学部長若くは科長 2名
- (c) 舎監 2名
- (d) 高等学部・中学部職員より選ばれたる1名宛の基督教信者教師 2名
- (e) 学院教会牧師及び前期委員が選出し得る学生若くはその他の者

それから610頁の7行目に1930年3月1日の委員会では次のことが決定されたとあります。これが日曜日委員会の答申です。

学芸的ナルモノ、即チ、文芸・講演・英語・音楽会等ニ出演ノ際ハ、ソノ出演ノ目的、宗教的・教育的ナルトキハ、コレヲ許可スルコトアルベシ。編集部ハ、日曜日ニハ、校正・醸金等ヲナサザルコトヲ勧告ス。

体育的ナルモノ、日曜日ニ始終スル競技ニハ参加セシメズ。数日間連続スル競技ニシテ、日曜日以外ノ日ヨリ始マリ、ソノ競技ノ目的、教育的ナルトキハ、1年1回ダケ、特ニコレヲ許可スルコトアルベシ。

5) 「資料2 日曜日委員会の設置と答申」（西南学院学院史企画委員会、前掲書、608-611頁）

但シ、当分、野球・庭球・蹴球・剣道・柔道ノ各部ニ限り、コレヲ適用シ、他ノ各部ハコレヲ許可セズ。

いま一つは、同年5月13日に、波多野から水町義夫に手交された「但シ書き」がある。それによると、出演・出場制限は、さらに緩和されている。

但シ、已ムヲ得ザル時ハ、許可スルコトアルベシ。

要するに「学院の日曜日を尊重するという原則は尊重する。尊重するけれども、教育現場においては多少柔軟な対応を示すことがふさわしい」というのが、日曜日委員会の出した答申でした。

それに対して、ミッション会議が日曜日問題について理事会に手渡した決議文の内容が611頁の後ろから2行目から書いてあります。

決議

我等ハ、西南学院理事会ガ、学院当局ニ対シ、昭和6年1月ヨリ、又ハ、昭和6年4月ヨリ、選手又ハ学生団ガ学院ヲ代表シテ日曜日ニ運動競技ニ出場スルコトヲ許可セザルヨウ、要求セラレンコトヲ決議ス。

決議文の内容は「日曜日問題に関しては原則を徹底するように、日曜日委員会の答申にあるようにいささか現場を配慮したり柔軟に対応してはいけない」というものでした。これら二つの答申を受けて、理事会は最終的にどうしたのか。色々考慮したと思われませんが、結局ミッション会議の決議に沿った決定を下したのです。二つの史料から、日曜日問題は学生と教員の問題だけでなく、教員の中でも或いは教員と学校当局の間でも難しい懸案となり、およそ二つの立場があったと分かります。一つは日曜日の試合出場を禁止するという原則を徹底する立場、もう一つは原則を尊重するけれどもそこに教育的配慮を加えるという立場です。これら二つの立場はとても近くて、そんなに大きく違ってい

るとは思われません。基本的に同じ立場なのですが、最後のわずかな解釈を巡って両者は対立してしまいました。それが日曜日問題です。さらに、その頃の西南学院にミッシヨンの影響が決定的であった事実も日曜日問題は示しています。

もう一つ紹介したいのは、1944（昭和19）年6月に波多野培根が「基督と愛国」という講演をしたのですが、その冒頭部分です。これは精神文化研究所が西南学院に設けられることになり、開設の際に行った講演です。「資料3 基督と愛国」⁶⁾の198頁の2行目から愛国心には2種類あると波多野は言います。その一つは次の通り（198頁5行目より）です。

自分の国家の利益になるものならば、悪事であっても構わずやるといった風なのである。強い国であれば理由の甚だ明瞭ならざる戦争をやりまして、弱い国を圧倒したり、他国の領土を取ったり、他国の富源を独占したりする。それがみな国家のためである、愛国の行為であるとして喜ばれる。これが今日、普通に世界各国で行われておる愛国であります。

これが一つです。それに対して198頁終わりの3行目から、もう一つの愛国心ということを行っています。

普通の人のように国家の名を以てすればいかなる悪事をしても構わないと言うようなことは、決してやらない。個人間で許されぬようなことは国家間でも許されぬ。弱い国をいじめたり、他国の領土を取ったり、他国の迷惑を構わず、ただ自国の権益を拡張すればそれが愛国だというような解釈は取らない。自分の国も利し、他人の国も利し、両者相益して、共に栄、互いに相親しんでいくということに重きを置き、いわゆる国家主義者の如く、他を犠牲にして自分だけの利益を拡張するようなことはしない。

6) 「資料3 基督と愛国」（『勝山餘籟 波多野培根先生遺文集』197-241頁）

こういう二つの愛国心があると述べた上で、波多野は情熱を込めて第2の愛国心を取り、その愛国心に生きることを勧めます。大胆に波多野が語ったのは1944年です。つまり戦時体制下の最も厳しい時代に、波多野は自ら信じることを西南学院の教職員と学生に向かって訴えかけたのです。村上寅次先生から何度となく伺ったことがあります。

C. K. ドージャー先生は西南学院の器を創ったけれども、その器に内容を入れることに貢献した人物に波多野培根先生がおられる。そのような一人に間違いなく波多野培根先生がおられる。

本当にそうだと思います。そして、そうであるならば村上先生が言われた「西南学院の器に注いだ内容」とは一体何なのか？それはどのような教育活動を指し、どのような特色を持ち、あの時代において何であったのか？そういった事柄を熱心に調査し研究する。このような研究活動も、現在の西南学院が担うべき重要な課題であろうと考えます。

第2節 創設期の教育者

創設期の教育者群像を考える上で、参考とすべき7名の教育者の氏名を記してみました。初めの4名は宣教師あるいは彼らの伴侶です。後の3名は日本人教師です。次の通りです。

- C. K. ドージャー (Charles K. Dozier 1879-1933)
- M. B. ドージャー (Moude B. Dozier 1881-1972)
- G. W. ボールデン (George W. Bouldin 1881-1967)
- M. L. ボールデン (Maggie L. Bouldin 1882-1968)
- 水町 義夫 (1885-1967)
- 波多野培根 (1868-1945)
- 杉本 勝次 (1895-1987)

C. K. ドージャーは西南学院が設立された1916（大正5）年に就任し、一貫してミッションの立場から西南学院の教育に打ち込みました。学生に対する立場や態度といったことに、彼はおおよそ疑いをもたなかったように思われます。それは単純と言えば単純、融通がきかないといえれば融通がきかないのです。しかし、この単純さにこそドージャーの力強さがあったと考えられます。

M. B. ドージャーは、C. K. ドージャーの伴侶として福岡に来ます。それ以来、舞鶴幼稚園や西南保姆学院で重要な働きをしています。

C. K. ドージャーが西南学院を辞任した後、第3代院長として西南学院を担ったのがG. W. ボールデンです。ボールデンも宣教師でしたが、日曜日問題では日曜日委員会答申の立場を尊重します。つまり原則は大切にすることも、そこに教育的配慮を加えようとしたのです。そのために、彼は学生あるいは多くの教員から支持を得ます。その意味では幸せな院長でした。しかし、ミッションとは対立し西南学院を辞任します。

M. L. ボールデンはG. W. ボールデンの伴侶として来日し、舞鶴幼稚園の指導者として支えます。M. B. ドージャーやM. L. ボールデンなど、女性の活動も創設期の西南学院を支えた重要な要素でした。

水町義夫は1917（大正6）年に西南学院に就任します。1933（昭和8）年には、第4代院長として日曜日問題の混乱を収拾しました。その後の厳しかった戦時体制下における西南学院の存立に責任者として対応した人物でもあります。

水町が表に立って対応したのと対照的なのが、波多野培根です。波多野は1920（大正9）年に西南学院に就任して、23年間学院で教えました。実はその間、一度として役職に就かなかったのです。むしろ学生と生活を共にしながら、教育者としての責任を全うします。村上寅次先生も波多野の薫陶を受けられた一人です。

杉本勝次は1923（大正12）年に西南学院に就任し、日曜日問題で責任を取って一度退職しています。その後復帰して、西南学院のためにいろいろと責任のある働きをした方です。

第3節 創設期における受容と継承

そこで、創設期を担った教育者における受容と継承について何が言えるのか。3つの特色を指摘します。

第1は、彼らがどこで教育を受けたのかという問題です。この件については一つの共通点しか指摘できません。つまり、彼らが教育を受けた時点で西南学院は存在しなかった。だから、彼らは西南学院以外で教育を受けている。しかも、それぞれの仕方でキリスト教と関わる教育を受け、福岡に西南学院が設立されるとキリスト教に基づく教育事業に彼らは次々と参加した。

第2に、彼らが与えたものです。文字通りのキリスト教教育が行われたのは、実は創設期だと考えられます。それは教科として持たれた聖書の時間とか、チャペルの厳格な実施に限らないのです。それらを含めて、学科を教えること自体がキリスト教に基づく人格的教育の場であった。もちろん教育現場には教師の個性がありました。C. K. ドージャーは信念を曲げないで学生に対する頑固な立場を貫きました。G. W. ボールデンは学生の声を聞き、柔軟に教育的配慮を施しました。波多野は生活さえも学生と共にしながら、教育に打ち込みました。このように、それぞれの教師に個性はありましたけれども、そこでは教育とキリスト教が分けることのできない一つのものとして学生に提供されていた。そういう教育現場がこの時期にはあったと思われまます。

そこで第3に、創設期において継承されたものについてです。西南学院にとって創設期が重要なのは、この時期に西南学院の基本的なあり方が決定されたからです。西南学院において最も大切なものは何なのか。西南学院という教育の場を通して、次の世代へと継承していかなければならないものは何なのか。西南学院が西南学院であることを確保するいわば教育現場の原体験、それは一体何であるのか。そういった西南学院にとって最も重要なあらゆる事柄が、この時期の教育現場で出来事として経験されていた。そういう重要性を持つ創設期に、当時の教育者はキリスト教教育への責任を負って、次の時代を担う学生に学院の教育理念を託していった。このようにして創設期に西南学院の教育理念を託された人たちによって、キリスト教教育は継承期へと続いていったのです。

第4節 創設期の課題と特色

そこで、創設期の西南学院についてまとめておきます。「創設期の課題と特色」です。

西南学院が設立された1916年は第1次世界大戦の末期です。その頃の日本がどのような状況にあったかという、国際的に開放された時期でした。そのような時に、この国のキリスト教は大変元気で勢いがありました。この勢いは1930（昭和5）年頃まで続きます。

キリスト教にとって極めて状況の良い時期に創設された西南学院は、その時に教育機関としての基本を整えようとします。すなわち、キリスト教に基く西南学院はどのような学校であるのかという基本を抑え、基礎を築きました。そういった根本的な教育理念を整備すると同時に、キリスト教学校の人的なあるいは経営的な基盤も整えています。

人的基盤に関しては西南学院における教育事業そのものが、次の時代のキリスト教教育の担い手を養成したと思われます。経営的な側面では、当初はミッションに随分支えられたのですが、いつまでも依存し続けるわけにはいきません。いずれ自立の時が来ますから、その時を自覚し自立の方向で励んでいかざるを得ませんでした。

そういった時期の西南学院が生み出したものとして、何よりも先ず学院におけるキリスト教教育があると考えられます。チャペルを通じ、教科を通じ、学院生活を通じて教職員はよくキリスト教に基づく生き方を生徒と学生に示しました。その受け止め方はさまざまだったでしょう。しかし、当時の学生は人間を育てる教育を西南学院において受けることができた。創設期はそのようにしてキリスト教教育において特色を見ることのできる時期であったと考えられます。

第3章 継承期の教育者群像

第1節 継承期はどのような時期であったか

「継承期の教育者群像」に入ります。継承期はどのような時期であったのか。

「資料1 年表」（「資料1」は現存しない）をご覧ください。「第2期 継承期」は、1946（昭和21）年から1970（昭和45）年に区分されます。この時期は軍国主義的物品的の整理から始まりました。その後、1947（昭和22）年に西南学院中学校を開設し、1948（昭和23）年には西南学院高等学校を設けています。次いで、1949（昭和24）年に西南学院大学を開設し、さらに1950（昭和25）年には西南学院短期大学部を発足させ、同じ時に舞鶴幼稚園と早緑子供の園を西南学院の組織に加えました。それ以降は西南学院大学に学部学科を次々と増設しています。他方、1950（昭和25）年には西南学院大学の学年歴に「C. K. ドージャー記念日」と「波多野培根先生記念日」を設定して、自覚的に西南学院の歴史を作り始めている。こういう時期です。それともう一つ、継承期の後半に学生運動が高揚し、これもこの時期の一つの特徴となっています。

継承期の特色を語っている資料をいくつか見ておきます。一つは「資料4 世界的日本人の育成を」⁷⁾です。「資料4」の24頁に河野貞幹の「院長就任の抱負を」があります。河野は西南学院の卒業生として初めて院長になった人です。その院長が就任時に受けたインタビューに応えた記事がここにまとめられています。

彼は第1に質問に答える中で、「西南独自の教育の場を持ち人格的交りのある学園を作り上げたい」と言っています。ここには一つの自覚が認められます。西南学院は特色のある独自性豊かな教育の場である。そこで、「これを大切にしたい」という自覚です。

第2は「学院を急速に大きくする必要はなく、将来の発展のために基礎を作るべきときだと思う」という発言です。つまり経営主義ではなくて、教育を中心として着実な学院の経営をすすめていきたいという主張です。

第3は「西欧諸国だけでなく、インド・香港などのアジアの大学にもどしどし留学して欲しい」という希望です。ここには、国際交流のビジョンがすでに語られています。

7) 「世界的日本人の育成を」（三善敏夫篇『河野貞幹先生記念文集 永遠の西南』24-25頁）

次にもう一つ「資料5 世界的貢献を目指せ」⁸⁾をご覧ください。これはE. B. ドージャーが創立50周年の記念式典で語った式辞をまとめたものです。ドージャーは式辞で、基本的に河野と同じことを語っています。基本は同じ内容なので、少しの違いが個性として際立ってきます。そういう中で興味深い一つは、小見出しの2番目「真の教育の場を」の中にあります。

ここでドージャーは彼自身の言葉で語っています。彼によると、「物品がマスプロダクションによって安くなるのと同じように、人間のマスプロも、私どもの人格を低下させる」。そこで「こういうような時に、私どもは、真の教育を、西南において施したいと思う」と語ります。ドージャーの主張はまさに河野が語っていたそのことです。ですから、一人一人の個性ある人間を育てていくために、それにふさわしい教育の場を作らなければならないという自覚に、西南学院の伝統を見ることができます。

もう一つは72頁にある「大学院の設置」です。創立50周年の時点でドージャーはすでにこのことを言っています。西南学院の教育が充実していくならば、自ずと大学院を整え、設置していく必要がある。そういった主張を文脈から読み取ることができます。

第2節 継承期の教育者

次いで「継承期の教育者」です。この時期の教育者群像を考えるために、6名の名前をあげています。次の通りです。

W. M. ギャロット (William M. Garrot 1910-1974)

E. L. コープランド (Edwin L. Copeland 1916-2011)

E. B. ドージャー (Edwin B. Dozier 1908-1969)

河野 貞幹 (1901-1966)

古賀 武夫 (1904-1992)

伊藤 俊男 (1901-1977)

8) 「世界的貢献を目指せ」(『西南学院七十年史 下巻』70-73頁)

まずギャロットです。彼は1948（昭和23）年に第5代院長に就任しています。西南学院が再建期にあった時期です。再建期に西南学院はC.K. ドージャーの精神性を保ちながら、立て直していきます。その中心になった一人がギャロットです。「ギャロットは本当に西南学院にとって大切な方であった」と複数の方から伺っています。「本当に大切な方であった」という内容をもっと調べなくてはなりません。

次にコーブランドです。彼は1952（昭和27）年に第6代院長に就任しています。彼について調べていて、「見識のある教育者」「冷静で学識のある教育者」という印象を強くしています。

それからE.B. ドージャーです。彼については第2部で詳しく述べます。

河野貞幹についても第2部で述べますが、西南学院の教育に携わった教育者として「誠実な人」であり、「誠実に事にあたるという良き伝統を生きた人」という思いを強くしています。

古賀武夫は1961（昭和36）年に第8代院長になった方です。大学の組合で委員をしていた時に、「古賀先生は偉い人であった」「教員の待遇改善に前向きに貢献してくださった方は、誰よりもまず古賀先生だ」と聞きました。確認をしたわけではありません。

伊藤俊男は1969（昭和44）年に第10代院長になっています。年表を調べていますと、西南学院にとって重要な方だったと思われます。

第3節 継承期における受容と継承

そこで、「継承期における受容と継承」です。継承期の教育者についても、3つの指摘をします。

第1は彼らが受けた教育に関してです。彼らの受けた教育は3つのケースに分けることができます。まず海外で教育を受けた宣教師、それから西南学院で教育を受けた日本人教師、さらに西南学院以外で教育を受けた日本人教師の3ケースです。その中から西南学院で教育を受け、西南学院で教えた日本人教師にとりわけ注目すべきでしょう。この時期を継承期としましたが、それは創設

期における教育の精神性を継いでいこうとする姿勢が顕著であったからです。この事実に注目するならば、西南学院の創設期に学び継承期の教育に責任を負った日本人教育者の重要性が浮かび上がってきます。

第2に彼らが与えたものです。継承期の西南学院は、保育園・幼稚園・中学校・高等学校・短期大学部・大学という小学校を除いたすべての年齢層に関わる教育に携わる総合学園という体裁をとっています。このように幅広い年齢層に西南学院は教育事業を通してさまざまに与えていた。この時期には西南学院独自の人格教育という気風が強かったと思われます。たとえば、宣教師の存在がキャンパスで非常にユニークであり、西南学院の特色であったと聞いています。だから、宣教師との出会いは当時の学生と生徒にさまざまな影響を与えていた。しかし他方、西南学院の規模が次第に拡大していく中で、人格教育に対する熱意に変化はなくても密度は薄くなっていった。そういった傾向が継承期の後半には進行したと思われます。

そこで、第3に継承期から次の時期へと引き継がれたものについてです。これについても3点指摘します。

まず、教育の精神性の継承です。西南学院における教育の精神性は、確かに継承期から次の展開期に引き継がれています。

次に総合学園という西南学院の性格です。総合学園はいきなりできる特質ではなく、学院の歴史によって築かれたものです。ですから、継承期に形成された総合学園としての性格は次の時期に継承されていきます。

さらに、教育事業に対するビジョンです。次の時期に課題となる事業へのビジョン、すなわち国際交流であるとか大学院の必要性であるとか、そういった課題がすでにこの時期に言及されています。

第4節 継承期の課題と特色

そこで、継承期の西南学院についてまとめておきます。「継承期の課題と特色」です。

日本の敗戦は戦後のキリスト教ブームを呼び起こし、それは1950年代まで続

きました。この時期はキリスト教学校にとっては順風の時期であり、西南学院もこの時に学院の再建を着実に進め、さらに総合学園へと組織を拡大しました。

教育の精神に関して見るならば、継承期の西南学院は創設期に形成された教育の精神性を十分に受け止めて次の時期へと継承しています。しかしながらその一方で、時代の要請に応じて例えば西南学院大学の学部学科を充実させたために、次第に教育の精神性が希薄になっていった。

つまり、教育精神の継承と社会の要請に応えるというこの二つの事柄を如何に統合していくのか。ここから発生してくる困難な課題がすでに継承期に始まっていたと思われまます。

第4章 展開期の教育者群像

第1節 展開期はどのような時期であったか

「第3期 展開期」に入ります。展開期は現在どのような時期であり、これまでにどのような時期であったのかについては「資料1 年表」を見て下さい。学生運動が一段落すると、西南学院は展開期の歩みを始めます。この時期の動向については「資料1 年表」に明らかなです。多くは西南学院大学に関係しています。その一つは大学院の研究科開設が続いていることです。それから1985（昭和60）年には児童教育学科に小学校教諭免許課程が設置され、博物館学芸員課程も設けられています。もう一つ注目されるのは、1973（昭和48）年の学院史編集室開設です。学院史編集室は『西南学院七十年史』編纂事業で中核となった部署です。

展開期に公表されたメッセージとして2つの資料を用意しました。一つはコープランド先生の「資料6 西南をよくするために」⁹⁾です。その内容は当時の西南学院に向けて的を射た語りかけだったと思われまます。詳細については省略しますが、要約すると一つは西南学院の現状に対して、「西南学院は伝統に

9) 「資料6 西南をよくするために」(『西南学院七十年史 下巻』119-121頁)

ふさわしい教育の場であるために十分に注意をするように」と言っておられます。もう一つは「これからの西南学院の方向性」について、「人間性を尊重し、国際性を重んじ、地域社会の要請に応えるように」と示しておられます。

もう一つの「資料7 国際交流」¹⁰⁾は来年度（1998年度）の入学案内から取ったものです。学生と日常的に接している中で、彼らの間では国際交流の制度が浸透しい刺激を与えていると感じています。キリスト教の特色の一つに普遍性があります。したがって、民族とか国家の壁を越える価値観あるいは交流の可能性をキリスト教はそもそも持っています。そのようなキリスト教に基づく西南学院が国際交流を推進し、それが学生の間に浸透しているのは極めてふさわしいと思われれます。

第2節 展開期の教育者

展開期の教育者群像を考えるために、院長経験者の4名と尾崎恵子先生を展開期の教育者として取り上げました。以下の通りです。

C. L. ホエリー (Charles L. Whaley 1922-)

L. K. シート (Leroy K. Seat 1938-)

村上 寅次 (1913-1996)

田中 輝雄 (1930-2009)

尾崎 恵子 (1925-)

ホエリー先生は西南学院に残されたメッセージがまとめられて1冊の本にされています¹¹⁾。この本から彼の教育者としての指針を読み取ることができます。

シート先生は折々に提言や指針を出されました。それらに対する評価がいろいろ出てくるだろうと思われれます。

10) 「資料7 国際交流」(『1998年度 西南学院大学案内』)。ただし、資料7も保存されていない。

11) 西南学院文書課・広報調査課(編)『道遥かなれども—C.L.ホエリー院長のメッセージ—』1988

村上寅次先生は西南学院にとって大切な方であったと思います。何が大切だったかと言うと、西南学院に学び西南学院の精神性を本当に大切にされたからです。たとえば、学院の歩みにおける様々な場面で建学の精神を判断基準にしておられる。そういった出来事を重ねることによって西南学院の歴史に名前を刻んだ方だと思えます。

院長経験者として田中輝雄先生をあげています。田中先生もいろいろと書いておられます¹²⁾ので、いずれ教育者としての評価が出てくるだろうと考えています。強いて言えば、田中先生は河野貞幹先生の教育者としてのイメージに続く方で、シート先生はE. B. ドージャーに続くイメージがあるように思われます。

その上で、尾崎恵子先生を入れています。西南学院関係者の中に生まれ育たれた先生は、美術を通して教育活動に参加されました。彼女の作品は学内の色々なところに散見されます。尾崎先生の教育活動が西南学院にとって何だったのか、興味深く大切なひとこまではないかと思われます。

第3節 展開期における受容と継承

「転換期の受容と継承」に関しては、勤務先が大学という極めて個人的な理由から、西南学院大学の現状分析から論を進めていきます。もちろんこのような述べ方には限界があることを承知しています。

第1は、現在の教育者は何を受容してきたのかという問いです。大学の教員が教員になるために受けてきたものは圧倒的に専門教育です。なぜならば、人事選考の基準は研究業績だからです。この事実から大学の教員を西南学院の教育の精神性から分析すると、3つのタイプに分けることができます。第1のタイプは、キリスト者で西南学院の建学の精神の具体化を大切にしたいと願っている教員です。第2のタイプは、キリスト者ではないけれども西南学院の伝統は大切にすべきだと考え、学院のキリスト教教育に協力している教員です。第

12) 田中輝雄『松の緑 青春の色』梓書院、2003

3のタイプは、キリスト者ではなくキリスト教教育についても無関心か否定的に考えている教員です。

したがって第2に、このような教員集団によって与えることができるのは何よりも専門の学問的知識あるいは研究活動の指導、さらに資格取得のための援助などです。そういった大学教育の中で、キリスト教教育の中核にあるキリスト教学やチャペル活動を大切にしていこうとする地道な働きがあります。

そこで第3に、現在の西南学院は何を次の世代に継承していくことができるのかという問いです。ここで西南学院は自信を失ってはいけないと思います。間違いなく現在の西南学院から次の世代に学院の精神性は脈々と継承されていくからです。人を作る教育、そのためにキリスト教は生きて働くことができる。そういう精神性を西南学院は伝えている。その際の問題は、この継承が学院全体でどの程度の情熱と影響力をもって行われていくかです。つまり、総合学園として規模が拡大していくと共にどうしても学院の精神性は希薄になっていく。現状ではなお全体の底流として精神性はある。けれども、これからそれを如何にして保つことができるのか。脈々としてあるだけではなく、西南学院全体として学院の精神性を保ち浸透させていくことが、問われていると思われます。

第4節 展開期の課題と特色

そこで、展開期のまとめとして「展開期の課題と特色」です。1960年代後半から70年代にかけて全国の大学で学生運動が吹き荒れました。その時にキリスト教界の中にも運動は波及して内部に対立を生み、混迷をもたらしました。そういう時期に西南学院は着実な発展を遂げています。この時期を展開期と規定したのは、継承期に示されたビジョンをこの間に確実に展開していったからです。つまり展開期の西南学院は継承期のビジョンを着実に展開し、しかも継承期の精神性を受容してそれを学生に与えています。

しかし同時に、コーブランド先生が「西南をよくするために」で訴えておられた警告が、この展開期に向けて発せられています。これは忘れてならない事実です。したがってこの時期の課題は、何よりもまず変わっていく時代の中で

如何にして建学の精神を継承していくのかです。新しい時代状況の中で建学の精神を継承しながら、しかもそれに新たな装いを持たせつつ具体化していく。これが継承期の課題です。

別の見方をするならば、現在の西南学院大学は学問性や専門性を高めると共に、地域の要請に応えることが求められています。地域社会は大学にとって重要な存在であり、西南学院大学はこの地域において立って行かなければならない。西南学院の精神性を継承しつつ、学問研究の専門性を高めしかも地域社会からの要請に応える。これらをどのように噛み合わせていけばいいのかは、まだ見えていない難しい問題です。

さらにそういった問題の上に、次の時期に向けてどういうビジョン・展望を示せるのかという課題があります。具体的な形としては百道浜校地等があります。しかし、そのような具体的な形の中にどのような内実を入れるのか。つまり、建学の精神の継承という教育精神の内容を新しい事業の展開においてどのように具体化していくのかはきわめて曖昧です。ここに西南学院の祈りが切実に必要とされています。

第5章 近未来の教育者群像を考える

最後に「第4期 近未来の西南学院」の教育者群像です。

第1節 近未来教育者群像の可能性

まず、「近未来の教育者群像の可能性」です。

これも大学教員の場合で考えます。おそらくこれから10年くらいは多少割合に変化はあるとしても、基本的には先程分析したように3つのタイプの教員で構成されます。まずキリスト者で建学の精神を理解する教員、次に非キリスト者だけでも建学の精神を理解し協力する教員、さらに非キリスト者でキリスト教育に対しては無関心か否定的な教員、そういう3つのタイプが続きます。

このように3タイプで構成が続く時に、近未来に建学の精神をめぐる教員像

でも2つの可能性が出てくると思われます。一つはキリスト者の教員と非キリスト者でキリスト教教育に批判的な教員が、学院における教育をめぐる対立し教育者群像としての全体像を失っていく可能性です。それに対してもう一つは、教員間の分裂を避けるために教育をめぐる不平や不満を残しながらも全体としての一致は保っているケースです。こういう二つの可能性がある中で、底流にキリスト教教育が生かされていくのは後者のケースだと考えます。つまり西南学院における教育の現状にいささかの不平不満はあっても、全体としての一致を保っている場合にはなおその底流にキリスト教教育は生かされている。

そのために必要なのは早急に結論を出すのではなく、教育をめぐる忍耐強く対話を重ね、お互いの立場を理解し合う。そういう努力を重ねることによって、西南学院全体としての教育者群像を保ち、底流にキリスト教教育を生かすことができると思われます。

第2節 西南学院は何を与えることができるか

次に、近未来の西南学院は何を与える事ができるのかを考えます。

3種類のものを与えることができると考えます。第1はキリスト教教育の精神に基づいて西南学院は何かを与え続けることができます。問題は何をどのような形で学生に提供できるのかです。そういう問題はありますが、それは近未来を担う教職員の課題であって、彼らによって与え続けることができるとだけ言うのが適切でしょう。

第2は大学における研究教育という分野への注目です。西南学院大学は大学という研究・教育の専門機関です。ですから大学の専門性を生かして、直接には大学生に様々なことを与えていくことができます。

第3は地域社会に対する貢献です。西南学院は福岡という地域に立つ大学です。今後ますます西南学院はこの地域に対して何であるのかが問われてきます。この問いに対して真剣に答えていくことによって、何か地域社会に貢献するものが生み出されてくると思われます。

第3節 西南学院史について — 教育精神の継承への手がかりとして —

さらに、「西南学院史について — 教育精神の継承への手掛かりとして」です。ここでは具体的な課題として、『西南学院史』について申し上げたいと思います。

一つは中学生から大学生向けの『西南学院の人物伝』です。西南学院で教え、西南学院で学んだ人たちの中から5名から10名位を選び、その人物伝をまとめます。『人物伝』というのは分かりやすいし、人の興味を引くものです。しかも5名から10名程集めると、西南学院とはこういう学院であるというおおよその全体像を示すことができます。そういった『人物伝』を中学生の教科書にしたり教職員に無料で提供したならば、西南学院が何であり何が西南学院の大切なことであるかを知らせることができます。

それと学問性と精神性を兼ねた『西南学院百年史』です。今年西南学院は創立81年ですから、19年後には百周年を迎えます。百周年の時にどういふ『西南学院百年史』を出版できるのかは、西南学院にとってとても大切な事です。

『西南学院百年史』は学問性と精神性を兼ねることによって、西南学院の歴史における教育の精神性を継承していくために十分寄与できるからです。

第2部 西南学院の教育者たち

はじめに

1 教育者群像と個々の教育者

第1回の講演会では、西南学院の教育者群像を考えました。そのために時期を区分してそれぞれの時期において西南学院の教育を担った方々を概観した上で、各時期の教育者群像を検討しました。その際にすき焼きに食材はいろいろあっても全体としてまとまった味があるように、西南学院の場合も個々の教育者に個性はあっても全体としてまとまりのある教育者群像を考えることができると仮定しました。

2 なぜ、個々の教育者か

そういった全体像を踏まえた上で、「第2部 西南学院の教育者たち」では個々の教育者について考えます。教育者群像の中に位置づけて、幾人かの教育者を考察するのです。

それにしても西南学院の教育者について、その全体像を明らかにしたらそれでいいのではないかと。何故、改めて個々人の検討が必要なのか。そういった質問が出てくるのではないかと思います。このような問いに対して答えたいのです。歴史というものは個人において最も深く具体的に共感することができる。そういう対象として個人はある。そもそも一人の人間から考察していく時、そこに私と同じ人間を見出すことができます。私と同じ人間が様々な状況の中で喜び悩んでいる。あるいは時に他者と共に歩み、時には共に歩むことができないで分裂の中に立たされている。そこに生きた人間がいます。このような生きた人間に共感する時に、その共感性が私たちと歴史の接点になっています。そして、この接点から歴史そのものに深く入っていくことができます。ですから、一人ひとりの人間との共感性から西南学院の歴史を学んでいきたいのです。

3 個々の教育者と教育精神の継承

そこで、「個々の教育者と教育精神の継承」についてです。「はじめに」で言及しておきたいもう一つの事は、個々の教育者における教育精神の継承です。西南学院全体における教育者群像に関しては、「第1部」で教育精神の継承について考えました。それと同様に個々の教育者においても、その継承を考えたいのです。

2つの理由があります。一つは個々人においてより具体的に考えることができるからです。教育精神の継承が西南学院において何であったか。この課題は、個々人においてそれがどのように受容され次の世代に継承されていったのかという検討によって、具体的に生き生きと学ぶことができます。これが一つです。

もう一つは私たちが西南学院に勤めている事実にあります。西南学院に勤めている日々をさらに意味のあるものとする。そのために、教職員は西南学院の教育精神を個々人において受け止めることが期待されています。なぜならば、それらを受け止めて教育現場に携わるならば、もっと力を込めて西南学院で働くことができるからです。だから、個々人の教育者について考えたいのです。

第1章 西南学院の教育者を考えるために

— 教育者を学院史との関わりから —

そこでまず、「西南学院の教育者を考えるために—教育者を学院史との関わりから—」です。ここで考えておきたいのは、個々の教育者を考察する際にどういった点から検討するのかです。3つの視点について紹介します。

第1節 視点1 — 略歴 —

視点の1は、「略歴」です。略歴の中でも教育者になるために彼は何を受けたのかに注目します。教育者を考える場合に、一般論として略歴の中でもとりわけその人自身がどういう教育を受けたのが大事な点だと思います。私自身の経験からも言える事ですが、初めて教える立場に立たされた時に懸命に探し

たのは自分がどのように教えられたのかでした。つまり、人は自分が教えられた経験を踏まえて教えるものです。そこでまず、略歴からその教育者が受けた教育に注目したいのです。

第2節 視点2 — 教育者としての姿勢 —

視点の2は、「教育者としての姿勢」です。具体的に言うと、教育者としてその人は何を与えたのかです。教育は本質的に与えることです。教育者は時間や能力など様々なものを教育のためにさきます。しかし、そういった物理的な要素だけではありません。そのような次元を越えて、人間として持っている精一杯のものを教育において与える。生きるということは何なのか。人間として大切なことは一体何なのか。要するに教育という場において、人は人生の根本問題を教えられ伝えていったのです。したがって、教育とはまさに人間が人間になる場です。そこで、視点の2は「教育者としての姿勢」ですが、とりわけ教育者として何を西南学院で与えたのかという点から考えていきます。

第3節 視点3 — 西南学院の教育者群像における位置 —

視点3は、「西南学院の教育者群像における位置」です。個々人の教育者の姿勢を明らかにしたならば、次いでその姿を各時期の教育者群像のなかに位置づけます。そうすることによって、一つには彼が西南学院のある時期にどういう立場にいたのかを知ることができます。

もう一つは、一人の教員を位置づけることによって西南学院の教育者群像がさらに具体的に明らかにされます。また、このような教育者を一人二人と加えていきますと、それぞれの時期における全体像を鮮明に理解できるようになります。そこで個別の教育者を教育者群像の中に位置づけたいのです。

第2章 C.K.ドージャーの場合 — 伝道と教育 —

そこでまず、創設期の教育者の中から「C.K.ドージャーの場合 — 伝道と教育と —」を取り上げます。

第1節 略歴

C.K.ドージャーは1879年に米国ジョージア州に生まれ、12歳まで母親から教育を受けました。家庭教育の結論として、1892年にバプテスマを受けています。それから公立学校で学び、その後2年間は学校で教員をします。それから1899年にマーサ大学に入学し、1903年に卒業しました。同年入学した南部バプテスト神学校を1906年に卒業し、この時M.A.パークと結婚しています。そして、海外伝道の幻をいだく二人は日本へ向かいます。九州の何か所かで働いた後、1911年には福岡バプテスト夜学校の校長を勤め、1916年に西南学院を創立します。しかし、1929年には西南学院院長を辞任し、1933年に小倉で亡くなっています。

ドージャーの略歴で、最も注目すべきは12歳まで母親から教育を受けた事実です。西南学院創立80周年を記念して出版された高松千博（編）『Seinan Spirit — C.K.ドージャー夫妻の生涯 —』¹³⁾を見ますと、彼の受けた教育というのは「基礎教育と聖書教育」¹⁴⁾でした。要するに「教育とは何よりもまず信仰者として生きること」の学びでした。つまり、信仰者として生きるために基本的な知識を受けることが教育なのです。そのような教育観はドージャーにとって決定的なものになったと思われます。なぜならば、教育とはまず信仰と信仰者としての生き方を学ぶことだと育てられたドージャーは、まさにそのように西南学院において教えようとしたと考えられるからです。

13) 高松千博（編）『Seinan Spirit — C.K.ドージャー夫妻の生涯 —』西南学院、1996

14) 高松千博（編）、前掲書、2頁

第2節 教育者としての姿勢

次に、「教育者としての姿勢」です。「資料8 ドージャーの人柄」¹⁵⁾をご覧ください。C.K. ドージャーと言いますと、どうしても日曜日問題において決して譲ることをしなかったイメージがつきまといまいます。確かにドージャーの人格を突き詰めていきますと、その根底に「キリストに忠実であろうとする姿勢」があります。そのような姿勢がありました。人はいつも自分の根底をあらわにして生きているわけではありません。ドージャーにはもっといろいろな側面があったわけです。例えば、「資料8」41頁の中程に三串一士が書いている文章や42頁で古澤正雄が書いている文章、さらに43頁で藤沼良顕が書いている文章から幾つかドージャーの性格について指摘できます。

第1にドージャーは喜怒哀楽の人でした。その時々喜びや悲しみ、あるいは怒りを率直に表現しました。両親の話をする時に、ドージャーは「すぐ泣かれる。眼鏡をはずして涙を拭きながら話される」(三串一士)とあります。そういう情感豊かな人でした。自分の気持ちに正直な人だったのです。

第2にドージャーは大声で笑う人でした。職員室においても生徒の前でも大声で笑う、ユーモアの人です。そこにはおそらく彼の人柄だけでなく、笑いのある明るい雰囲気を作ろうとするドージャーの意図があったと思われます。

第3に質素な生活をしていました。物を大切にできる生き方が何処から出てくるのかと思います。物を本当に大切にできる人間、それは生き方がはっきりと定まっている人だと言えるでしょう。生き方が定まった時に、何を大切に何をも簡素にするのか、そういった人間の生活がでてきます。そのような生活の元にある生き方は学生に影響を与えたと思われます。

第4にチャペルでの厳しさです。学生が嫌になるほどチャペルにおいてドージャーは厳しかった。何故、それほどまでにチャペルで厳しかったのか。それは彼自身が受けた躰けが前提にあると思われます。つまり厳しく躰けられてドージャーは最も大切な信仰を身につけた。だから自らが教育されたように学

15) 高松千博(編), 前掲書, 41-43頁

生を厳しく育てようとした。そのようにして、最も大切な信仰を西南学院の学生に与えようとしたのです。

第3節 西南学院の教育者群像における位置

最後に、「西南学院の教育者群像における位置」です。このように見てきますと、ドージャーは素朴で明るく、そのような態度と人柄で学生を大切に育てようとしていたことが分かります。しかし西南学院において記憶されている彼の人柄は、頑固と思われるまでキリストに対しては忠実であろうとした姿勢です。

日曜日問題において教員の間には二つの立場がありました。一つは原則を尊重しながらもそこに教育的配慮を加えた立場、ボールデンはこの立場に立ちました。もう一つはあくまで日曜日の運動は禁止する原則厳守の立場で、ドージャーはそこから一步も退くことをしなかった。学生に「こういうドージャーのあり方をどう思うか」と聞いてみました。そうすると児童教育学科の学生が手を挙げて言うのですが、「教育的配慮を欠いたそういう教師は教師としては失格だ」と言います。ただし「失格だ」と言った上で、一部の学生は「しかし、西南学院が開設された当時には学院の基礎を据えるためにそのような頑固さも意味があった」と考えます。要するに、教育に対する頑固さがなければ創設期に西南学院の基礎を据えることはできなかったと思われるのです。

C. K. ドージャーの西南学院の教育者群像における位置は、創設期においては対立する二つの立場の一方の側の中心人物ということになります。そして、対立するもう一つの側の中心人物はボールデンです。ボールデンは、長い間ドージャーにとって同労者でした。それだけでなく、多くの教員もボールデンの立場を支持しました。したがって、日曜日問題でドージャーは多くの同労者やボールデンと対立せざるをえなかったのです。そこに彼の苦悩があったと考えられます。継承期以降の西南学院においては、ドージャーのかたくなまでのキリストへの忠実という姿勢が大変評価されて、そこに西南学院の原点すなわち拠って立つべき精神があるとされています。

第3章 波多野培根の場合 — 教育に賭ける —

創設期の教育者からもう一人見ておきます。波多野培根です。略歴から紹介します。

第1節 略歴

波多野培根は1868（明治元）年に山口県津和野に生まれています。儒教の教育を受けた後に、1885（明治18）年に同志社英学校に入学し、1886（明治19）年に洗礼を受けました。1890（明治23）年に同志社を卒業すると、同志社で教えます。しかし1892（明治25）年には同志社を退職して、伝道活動に従事しました。1897（明治30）年からは仙台の尚綱女学校等で教えます。そして、1904（明治37）年に同志社へ復職します。ところが、1918（大正7）年に同志社を退職し、1920（大正9）年から西南学院で教えています。1938（昭和13）年に西南学院を退職しますが、その後も続けた西南学院嘱託講師を退いたのは1944（昭和19）年でした。培根は1945（昭和20）年に京都で亡くなっています。

略歴からまず波多野培根について言えることは、彼の受けた教育です。波多野の父親は津和野藩校の教員で、儒学の先生でした。培根は父親から儒学を学び、さらに高名な陽明学者の塾で儒学を学びます。このように儒学の素養を身につけた上で、同志社英学校に入学しました。そして同志社で生涯を決定づける大きな影響、つまり生涯に及ぶ学問と信仰を受けました。これが彼の受けた教育です。

次にこのような影響を同志社で受けて培根はどうしたのか。彼は伝道者としてあるいは教育者としてそれぞれの現場に従事します。伝道者としては東北地方にあるいくつかの小さな教会を回りました。教育者としても幾つかの学校で教えた後に、同志社で教えました。そういった経験が西南学院で教える前にあります。したがって、様々な経験を積んだ上で、波多野培根は生涯の最後に西南学院を働き場にしたいことができます。

第3にそれでは多様な経験が培根の西南学院における教育にどのような特色を

もたらしたのか。伝道あるいは教育で様々な経験を積んだ培根は西南学院においては教育一筋でした。西南学院ではどのような役職にもつかず、学生寮で学生と生活を共にしながら、学生に対する教育一筋に23年間打ち込んだのでした。

第2節 教育者としての姿勢

そこで、波多野培根の「教育者としての姿勢」です。「資料9 波多野培根先生と西南学院」¹⁶⁾をご覧ください。「資料9」の284頁下段の終わりから3行目からが、特に西南学院における波多野培根について書いています。時間の都合で読むことは省略しますが、読めば読むほどここに書かれているのはまるで書生のような生活という印象を強くします。前向きに着実に求めつつ歩む。書生のような生活を老境に入りつつあった培根が西南学院で送っている。そこには余計なものが何も無く、極めて簡素であった。そういう生活において人に対する思いやりであるとか、祈りであるとか、思想であるとかが磨かれていきます。純化され、純粹になっていきます。今の時代に人格の純化、人の魂が磨かれていくことはとても大切です。なぜなら、人の思いや人の祈りは時をかけて磨かれ純化されていく時に、純化された言葉や祈りは本当に力をもつからです。波多野培根は言葉と祈りにおいて、そのような力を持った人であると思います。

そして、波多野培根の簡素な生活の中心にあったもの、それは教育であり研究でした。培根が終生尊敬したのは同志社の新島襄です。新島襄の偉いところは、いつも学生の事を考えていたことです。彼はどこにいても学生の事を考え、祈っていた。恩師新島の如くに培根もまた、生活の様々な場面においていつも学生の事を思い、祈り、語りかけていた。それが簡素な生活の中にあつたので、学生への思いと祈りは純化され、彼らの心に響いたと思われます。

そういう教員が23年間、西南学院において学生の中に学生と共に生活していた。この事実は西南学院の教育現場において一体何であつたのだろうと考えさせられます。教育をして教育たらしめるもの、それは学生に対して人格的感化

16) 「資料9 波多野培根先生と西南学院」(『勝山餘籟—波多野培根先生遺文集—』283-287頁)

を与える力です。そのような人格的感化を与えるだけの存在感，まさにその存在感が西南学院における培根にはあった。だから，波多野培根から創設期の学生は人間として生きる何かを教えられていた。それは本当に幸いなことであつたと思われます。

第3節 西南学院の教育者群像における位置

最後に，波多野培根の「西南学院の教育者群像における位置」です。23年間ひたすらに教育に打ち込んだ培根の西南学院の教育者群像における位置はどういうものであつたのか。

村上寅次先生は「C. K. ドージャーが西南学院の器を作り，その内容を入れた一人の人物として波多野培根先生がおられた」と言われました。そうであるならば，培根が西南学院に注ぎ込んだ内容とは一体何であつたのか。そういうことを考えますと，一つとして教育に対する情熱，学生に向けた情熱があつたと言えましよう。第1部で，波多野が76歳の時に行った講演の冒頭部分を紹介しました。そこで，愛国心について述べた上で，「日本の国は道理のある国として世界の中で生きなければならない。歩まなければならない」といった主張を老波多野は熱く訴えていました。その訴えに培根のうちに脈打つ熱いものを感じます。教育にはおおよそ熱いものがなくてはなりません。学生に向かつて理想を訴え，情熱を込めて学生に語っていく。そこには熱いものが備わっていて，そうして初めて学生に注いでいくことが出来る。熱いものがなければ，伝えるべきものも伝わっていかない。今の西南学院にそういう教育にかける熱いもの，学生に期待する情熱がどれほどあるだろうかと思ひます。いづれにしても，波多野培根には学生に向ける情熱，教育にかける熱いものがあつた。

もう一つは，一人ひとりの学生をおろそかにしなかつたことです。「資料9」の285頁下段の中程に，波多野の部屋を訪ねた学生たちに波多野培根がどのようにふるまつたのかを書いてあります。その中には間違いなく村上寅次先生もおられたと思うのですが，尋ねてきた一人ひとりの学生に対して，「信仰につき，人生につき，時局につき……とどまることのない熱弁をもって何時間

も語り続けられた」(「資料9」285頁)とあります。そのような熱弁、情熱をもって一人ひとりの学生に語りかける。それは心から学生たちを大切に思い期待する心あればこそ、そのような振る舞いと熱弁が出てきたのでしょう。培根に限ったことではありませんが、一人ひとりの学生を大切にすることは、その後の西南学院に根づいている良い伝統であろうと考えます¹⁷⁾。

第4章 河野貞幹の場合 — 伝統を生きる —

次に継承期を担った河野貞幹です。

第1節 略歴

まず、略歴です。河野貞幹は1901(明治34)年に福岡県若宮町で神主の家系の長男として生まれています。1902(明治35)年1歳の時に火傷で手に怪我をし、この年父親を亡くしました。1921(大正10)年4月に西南学院高等学部文科に入学、1925(大正14)年3月に西南学院高等学部を卒業すると西南学院の図書館に勤務しています。さらに同年10月からは中学部の教師として英語を教えました。1929(昭和4)年に塩田十一と結婚、1935(昭和10)年8月に米国へ留学します。米国各地で研究を重ねた後に1939(昭和14)年8月に帰国すると、西南学院専門学校の教授を勤め神学を教えました。1940(昭和15)年には教授を勤めながら、大牟田教会の牧師を兼務(1941年まで)します。1949(昭和24)年には西南学院大学の教授となりました。1953(昭和28)年に何度となく頭部に異常を覚えています。1955(昭和30)年10月に西南学院の第七代院長に就任しました。1959(昭和34)年に筋萎縮症(筋ジストロフィー)と診断され、体の自由が奪われていきます。1961(昭和36)年11月に院長を辞任し、1963(昭和38)年には退職します。1966(昭和41)年に亡くなりました。

17) 波多野培根については、下記を参照。

塩野和夫「村上寅次『波多野培根伝』の研究」(『国際文化論集』第27巻、第1号、2012年、1-120頁)

河野貞幹の略歴で注目したい一つのことは、神主の家系にあった事実です。何も分からない1歳の時に父親を亡くしたとはいえ、彼には神主の家柄であるという自覚が幼い頃からあったに違いありません。ところが神道の家系にある河野が西南学院で学び、キリスト教信仰に導かれていく。私にはその事情を分かる気がします。仏教や神道の家系に生まれた人たちは宗教的な感性を持っていて、しばしばその感性がキリスト教の中心的な所を直観的に捕らえる。そうして、キリスト教信仰に入ることがあります。同志社の神学部で勉強していた一人の友人は、浄土宗のお寺の子息でした。毎朝読経をしていただけあって、非常に声のいい人でした。ところが、彼は感動して牧師になります。仏教で育てられた彼には、キリスト教が分かったのだと思います。同じように河野もキリスト教が分かったので、キリスト教信仰に入ったのでしょう。それからは教会の牧師職の兼任などもしながら、西南学院の教員として生涯を誠実に過ごしました。西南学院出身者として、最初の院長にもなっています。

もう一つ注目したいのは晩年の河野です。筋萎縮症（筋ジストロフィー）にかかって、病気が進行していったまさにその時における教育者河野です。歩行や食事すること、研究や講義すること、そういった全てのことが確実に奪い取られていく。そのように病気が進行していく中で、河野は如何に生きたのか。そのような状況で、河野はどういう教員であったのか。教育者の真価というのは、時としてその人が教員として最も力に満ちている時ではなく、むしろ体の力が奪われていき歩くことも不自由になっていく。そういう時に、その最後の時にその人の存在そのものからにじみ出てくる。このにじみ出てくるものが、その人の教育者としての真価を最も語っている。そういうことがあろうと考えます。河野もまさに病気が進行し体の自由が奪われていく中で、教育者としての真価を発揮した方だと思います。

第2節 教育者としての姿勢

そこで、教育者としての姿勢です。「資料10 最後の授業」¹⁸⁾をご覧ください。読みます。

「最後の授業」

日隈 光男

先生は最後まで後進の指導に情熱をかけておられました。昭和三十七年、病状が日毎に悪化していく中で、当時神学科に入学した私たちのために「新約聖書緒論」を教えて下さいました。

しかし、病は重く休講続きでした。その事によって先生の病気がどんな性質のものかを知るようになりました。生活のいっさいに奥様の手をかりなければならぬような状態だという事も聞きました。心配している私達の前に先生が姿をあらわされたのは、もう初夏の頃ではなかったかと思われます。

歩行不能にもかかわらず、体の具合の良い時は、自分の体を教室まではこんでくれといわれていたそうです。人の肩を借りて、教室に入ってこられました。しかし先生のお顔をみた私たちは、それまでいっていた心配や緊張がいっぺんに消し飛んだような感じでした。喜びに輝いたお顔で一人一人をみまわし、よく神学校にやって来たねといわんばかりにニコニコして「自己紹介をして、君達の出身教会を教えてください」といわれ、一人一人の答えにうなづいておられました。

先生は当時もう既に立つことも白墨で書くことも出来ませんでしたから、大部分は学生に問題を与えて研究させ、交互に発表し、先生がそばで指摘していくというやり方で授業はすすめられました。先生から一番教えられた事は緒論の知識ではなくて信仰の喜びと感謝であると思います。

体が不自由になったので、他の仕事が出来ず、かえって聖書を読む時間が多

18) 「資料10 最後の授業」(三善敏夫編『河野貞幹先生記念文集 永遠の西南』477-478頁)

くなったので感謝だと、喜々としておっしゃっておられました。今も強く印象に残るのは、授業前の短い礼拝の時です。教室に入ってきて、座られるとすぐ、毎日の闘病生活の中で読まれ感銘をうけた聖書の数節を、時には一章にわたって、それをご自分で読まれ、一言二言話され、深い祈りをいつもささげておられました。それはまさにみ言が生きて迫ってくるようでした。

それから、先生が教室にいらっしゃるのは大変だから、お具合の良い日に私達、学生の方がお宅へうかがおうと、誰いうとなく決まり、西新町のお宅へ授業とご病気見舞をかねてうかがったのも楽しい思い出です。神学生は腹がへっているから母さんあれを出してあげなさいとか言われ、何やらいただき、先生の若い時代の話がうかがいました。ある時、テキサスの田舎を旅してバプテストのお百姓さんに出会い、その単純素朴な信仰に感激した事の話され、バプテストの良さをもっと我々は学ばねばならない等と語っておられました。

後進、特に神学生や若い伝道者に対する先生の思いやりは深く、先生に私淑していた先輩が多くいたのも無理からぬことと思われまふ。そのあたたかい思いやりは忘れる事が出来ません。私は卒業直後、結婚式をあげる事になり、ごあいさつにうかがいますと、君、モーニングはあるかね、何なら僕のを着てみなさい。これはバプテストの牧師達が皆んな着たものだから、あやかるといよいよおっしゃって出して下さいました。胸のあつくなる思いが致しました。いよいよ任地へ立つ日、お別れにうかがいますと、いろいろ話しをして下さり、一言祈ろうと、深く祈られ、「私のかわりに、今度は君たちが行く番だよ、私はここで祈っているからね、がんばって来なさい」と云って送り出して下さいました。それが先生との地上でのお別れになるとは夢にも思っていませんでした。

ここから二つのことを申し上げたいのです。一つは宗教者であり、西南学院においては教育者であった河野貞幹の姿です。478頁上段の真ん中あたりですが、筋ジストロフィーが進行して自分ではもう歩くこともできない。そういう状況の中で河野はまず聖書を読んだ。それは数節であつたり、時には一章に及

ぶ聖書を読んだ。そして、病床で自分が感銘を受けた聖書の言葉を読んで一言二言語すと、皆の前で深く祈った。その深い祈りが皆の心を非常に打った。そのような祈りや行為は一体何であったのか、どこから出てきたのかと思います。その時に河野は筋ジストロフィーという重い病気であることさえ超えて、今を生かされている。今を主の恵みに生かされている。宗教的生命に全く捕らえきられている。そういう状態であったと思われます。それは「まさにみ言が生きて迫ってくるようでした」と結ばれていますが、この結びの言葉は河野の祈る姿が人間として如何に真実なものであり、真実な人間の姿は人の心にどれほど迫るものを持っているかを語っていると思います。そのような宗教者としての、また西南学院においては教育者としての河野の姿は、キリスト教教育とは何であるのかを自らの姿勢で語っていたと思います。

もう一つは同じ頁の下の段の最後で、任地に立つ日、お別れにうかがったところからです。この場面では、教育精神の伝承という事柄が見事に表現されています。河野は自らが西南学院で学び与えられたことを大切にしながら、西南学院で教えました。例えば、ある方は「先生の偉大さは世界バプテストの役員として世界を廻られたり、西南学院の院長をされたという事よりも、寧ろキリストの一人の僕として最後まで忠実に仕え、小数の学生を集めて彼等を愛し、ささやかな聖書の講義や輪読会を続けられていたあの姿の中に私は見出すのである」¹⁹⁾とっておられます。ここに浮かび上がってくる河野の姿には、波多野培根に重なるものがあります。したがってあの時、河野は自らが西南学院で引き受けた生き方を西南学院で学んだ後進の者に委ねていたわけです。それが「私のかわりに、今度は君たちが行く番だよ。私はここで祈っているからね、がんばって来なさい」という励ましです。こういう実存のかかった励ましや祈りは、語りかけられた者の魂を揺さぶり動かします。そしてまさに、後進の者の魂が揺さぶり動かされているそのところに教育の神髓が現れています。そこにおいて、教育の精神もまた伝承されていくからです。

19) 古澤嘉生「河野貞幹先生と私」(三善敏夫編、前掲書、454-456頁)

第3節 西南学院における教育者群像における位置

最後に河野貞幹の西南学院の教育者群像における位置です。河野が西南学院に勤務したのは、1925（大正14）年から1963（昭和38）年までの38年間に及びます。前半の20年間は第1期の創設期にあたり、後半の18年間は2期の継承期に属します。このように西南学院の創設期から継承期にまたがって教えたわけですが、西南学院の教育者群像における位置から考えると河野を継承期に属するとする方が適当だと考えます。しかも、継承期にあってその中心にいた一人の教育者と位置づけることができます。そのように考える場合は、創設期に20年間西南学院で教えたことを将来の準備の時として考えるべきでしょう。

さて河野が継承期を担った中心の一人であるという時に、3つのことを指摘しておきます。

第1は、河野が西南学院で学んでいることです。彼が西南学院で学んだ事実はその全人格と全生涯にとって決定的な意味を与えています。西南学院で学んでキリスト教信仰を与えられ、生涯の働きの方もまたそこに与えられた。ここで河野にとって大切な事柄は「素直さ」であろうと思います。素直な心は真実なものを見抜き、大切なものを自分の内に吸収していくからです。河野にはそういう素直な魂があって、その魂で教員になってからも西南学院から多くのものを吸収し続けた。そういうお手本のような人ではなかったかと思われます。

第2に、西南学院で与えられたものを継承期の中心にいて河野が与えていったことです。継承期には創設期に対して新しい時代状況がありました。この新しい時代状況にあって、河野は西南学院の精神的伝統を重んじて学生に教え与えながら、院長として学院の様々な出来事に携わっていった。

そこで第3に、河野は西南学院で与えられ西南学院で精一杯与えた生き方を通して、次の世代に西南学院の精神性を委ねたことです。委託することを通して、西南学院の精神性を次の展開期に継承していった。そのように言えようと思います。

第5章 E.B.ドージャーの場合 — 伝統を展開する —

次に、E. B. ドージャーの場合です。略歴を読みます。

第1節 略歴

E. B. ドージャーは1908（大正7）年に長崎で生まれ、母親から教育を受けています。そして、1920（大正9）年に福岡バプテスト教会でバプテスマを受けました。1921（大正10）年に米国で1年間の高校生活を経験した後に、1922（大正11）年には神戸カナディアンアカデミーに入学します。その後、1926（昭和元）年に米国ノースカロライナ州にあるウエイクフォレスト大学に入学し、さらに1929（昭和4）年には南部バプテスト神学校に入学しました。1932（昭和7）年にメアリー E. ウィリーと結婚し、同年日本へ来て西南学院で教えます。太平洋戦争勃発の年である1941（昭和16）年には家族でハワイへ移り、活動しました。戦争が終わった翌年1946（昭和21）年にはバプテスト教会の使節として日本へ来て、1947（昭和22）年に日本バプテスト連盟を結成しています。1948（昭和23）年からは東京で働きましたが、1958（昭和33）年には再び福岡市の西南学院で教えることとなります。そして、学生運動の激しかった1969（昭和44）年に亡くなっています。

このような略歴から父親の C. K. ドージャーと非常に似た3点を指摘できます。第1は初等教育を母親から受けたことです。母親から受けた教育の内容は、聖書教育と初等教育です。したがって、E. B. ドージャーにとっても学ぶということは何よりもまず、その教育を通してキリスト教信仰に導かれる、そういう教育でした。これは C. K. ドージャーと同様です。

第2は1932年から1941年までと1958年から1969年までの2度にわたって、C. K. ドージャーと同様に E. B. ドージャーも西南学院で教えていることです。ドージャー親子は働きの方も同じくしました。

第3に C. K. ドージャーは西南学院の問題を苦悩しつつ亡くなっていったのですが、同じように E. B. ドージャーも学園紛争の中で非常に苦痛を受けて亡

くなったのです。

このように重要な類似性を持ちながらも、E. B. ドージャーは父親とは違った性格を有し、西南学院の教育者群像の中においても違った位置づけをえています。

第2節 教育者としての姿勢

そこで、「教育者としての姿勢」ですが、「資料11 大学紛争と栄光の死」²⁰⁾を用意しました。父親のC. K. ドージャーを尊敬していたE. B. ドージャーは「キリストへの忠実」を繰り返す訴えながら、新しい時代の状況にあって国際交流や大学院の設置といったビジョンを院長として示しました。

このようなE. B. ドージャーの教育者としての姿勢について学生に聞きますと、類似した答えがよく返ってきます。「E. B. ドージャーは父親を尊敬していたけれども、父親とは違ったタイプの教育者であったと思う。なぜならば、E. B. ドージャーは学生に対しても時代状況に対しても、もっと柔軟にそれを観察し判断し対応した。そういう柔軟性において父親のC. K. ドージャーとは違う」。学生の考えるような印象を受けます。E. B. ドージャーは確かにそのような柔軟性を持っていました。けれども、違う側面も示しています。「資料11」の113頁中程に1968（昭和43）年2月の学園紛争におけるドージャーの経験が記されています。この時の学園紛争によって彼は随分体を悪くして、院長職を継続する上で健康上の問題を抱えることとなります。そういう事情であれば、健康上の理由で院長を退いて無理をすることはなかったのです。しかし、ドージャーはそこで院長職に留まります。そして115頁にある通り、それは1969（昭和44）年4月のことでしたが、この時彼は再び悲痛な経験をして帰らぬ人となってしまったのです。「日本人を愛し、西南学院の学生たちのため、真心を尽して愛と誠実を示してきたエドウィン・ドージャーにとって、敬愛する父の写真が破損されるという事件は、心臓に針を打ちつけられるような心痛を伴

20) 「資料11 大学紛争と栄光の死」（斎藤剛毅『神と人にと誠と愛を—E. B. ドージャー先生の生涯とその功績』112-123頁）

う出来事であった」。これが彼の悲痛な経験でした。

したがって、E. B. ドージャーには教育者としての二面がありました。一つは学生の指摘する父親とは違って柔軟に物事に組み、判断していく一面です。もう一つはそういった対応をする根底に実は、父親と同じ頑固さという譲らない一面があったと思われます。そういう資質を持って本当に難しかった時期に責任を負い立ち続けた姿が、「資料11」に記されています。

第3節 西南学院の教育者群像における位置

そこで、E. B. ドージャーの「西南学院の教育者群像に置ける位置」です。彼の場合も、第2期の継承期に位置づけて3点を指摘します。

第1は西南学院の教育精神の継承です。ドージャーは河野のように西南学院で学びませんでした。西南学院で何かを受けることはなかったわけですが、父親と母親を尊敬して西南学院の精神性と教育精神の特色を受け継いでいこうという意欲に満ちていました。そして、そのような教育者として継承期の教育事業に参加していきました。

第2に伝統の展開です。河野の場合はどちらかという、伝統を引き継いで継承していく。つまり、受け取ったものを学生に与え委ねていくという側面が強かったと思います。それに対してドージャーの場合は、伝統を引き受けるとそれを新しい時代状況の中で大胆に展開していこうとした。そういう気風が河野よりは強かったと思います。例えば「キリストへの忠実」という父親の遺訓を、「神と人との誠と愛を」という言葉に言い換えようとしています。あるいは西南学院の教育事業に国際交流や大学院の設置といったビジョンを打ち出して、新しい西南学院を建てていこうとしています。ここにドージャーの特色を見ることができます。

第3にドージャーの死です。この会場には直接立ち会った方々もおられますので、私が本当に分かっているかという、いささか心もとないこともあるわけです。しかし、いずれにしても学生運動が盛んな時期は、キリスト教学校にとっては判断の難しい時でした。ですから、あの時に責任を負うことは大変な

困難を伴ったと容易に想像が付きまします。そういう時に死に至るまで責任を負いきった人の存在は、キリスト教学校である西南学院の原点を思い起こさせ、もう一度固くそこに立つことを促した。E. B. ドージャーの死は、そういう出来事であったと思います。

第6章 西南学院の伝統とこれから

はじめに

最後に「西南学院の伝統とこれから」です。キリスト教教育には二面性があると考えます。

一つは時代が変わっても状況が変わっても、変わることなく大切に守りつづけていかなければならないものです。それをなくしてしまうと、キリスト教教育はキリスト教教育で無くなってしまいます。そういう大切なものがあると考えます。そういうものについては、時代や状況に関わりなくキリスト教学校は大切に守り抜いていかなければならない。そういう一面があります。

しかしもう一面があって、それは時代や地域社会の要請に応え、大胆に西南学院を変革していく必要性です。変革していく時に古いものでは役にたたなくなっています。だから、大胆な絶えざる変革が必要なのです。

キリスト教が2千年の歴史を生き抜いてきて、しかも世界に広がっている。それは一体何であったのかと考えると、変えてならないものと変えるべきものの二面性をそれぞれの時代において巧みに使い分けることができた。だから、様々な状況で生き抜くことができたのだと思います。同様のことがキリスト教学校にも言えます。変えてはならないものと変えるべきものを見分けて、巧みに使い分けていく。そういったことが大切であろうと考えます。

第1節 キリストへの忠実 — 教育者としての個性1 —

そこで、「キリストへの忠実 — 教育者としての個性1 —」です。変わらな

いものとして、キリスト教の変わらないものから生み出されてきた西南学院の特色を2つあげたいのです。

第1はキリストへの忠実です。このキリストに対する精神を如実に西南学院に示し、現在においても示しつづけているのはドージャー父子です。C. K. ドージャーの場合は日曜日問題におけるかたくなまでの姿勢、その根拠としてキリストへの忠実がありました。当時は彼に反対する者も多く、痛みを感じるものがあつたに違いありません。それでも、変わることなくキリストへの忠実な姿勢を彼は持ちつづけた。

息子の E. B. ドージャーの場合はそういう精神性を継承しながら、もっと柔軟に対応したと言えます。しかし、学園紛争の中で彼が責任を負い抜いていった根本にはキリストに忠実であろうとする姿勢があつた。

そのような姿勢は西南学院に繰り返し、自分たちの拠って立つべき原点、ここに西南学院は立つという原点を確認させています。そういった西南学院の存在理由を示したのは、ドージャー父子の教育者としての生き方に違いありません。そして、彼らによって示されたキリストへの忠実という精神は、教育事業を担う学院の個性として、拠って立つべき土台として認められ、現在においても絶えず自覚されています。

第2節 学生を育てる — 教育者としての個性2 —

第2に「学生を育てる — 教育者としての個性2 —」です。教育機関である西南学院が人を育てるのは自明の理です。当然のことです。しかしながら、当然のことを良き伝統として継承していくのは決して容易なことではなく、実は至難の業だと思われまふ。なぜならば、教員に対しても職員に対しても、学生を愛し何よりも学生を育てることを第1とする姿勢から引き離していこうとする様々な力が絶えず働きかけているからです。それは何も人に対してだけではなく、西南学院という組織に対してもそういう力は働きかけてくるのです。しかしそうであればこそ、そのような誘惑がある中であつても地道に学生を育て期待し大切なものを彼らに委ねていく。そういった教育事業に打ち込む教育

者を西南学院は与えられてきた。これは本当に学院の幸いな歴史であり、したがって西南学院の何よりも誇るべき良き伝統に違いありません。

波多野培根の場合、彼は23年間、文字通り教育一筋でした。学生と生活を共にし、教育を中心にした簡素な生活を送り、時を忘れて彼は学生に語りかけたのです。そういった伝統を引き継いだ一人が河野貞幹です。河野は多くの役職も経験しましたが、病気によって何もかも奪われていく中で教育者としての真価は発揮されました。河野が筋ジストロフィーの悪化するなかで最後に示したのは、学生を大切に、彼等を信頼して一切を委ねていこうとする教育者の姿でした。

西南学院のキャンパスは学生を育ててきました。一人ひとりの学生に期待し、教職員の志を学生たちに託してきました。これからもそういうキャンパスであり続けて欲しいと強く願いますし、現在のキャンパスはまだまだそういう精神性が生きて働いていると思います。

第3節 伝統の継承

第3に「伝統の継承」です。西南学院において良き伝統として認められる2つのものとして、「キリストへの忠実」と「人を育てる」ことをみてきました。それらはいずれもキリスト教教育を実施する西南学院において継承されてきました。そうであるならば、そういった伝統をこれからも西南学院が全体として継承していくことは可能なのか。可能だとすれば、それは如何にして可能なのか。この課題についていささか考えるところを申し上げたいのです。

それを可能にする第1は中心に立つ人たちの必要性です。キリスト教信仰の立場からすると、「キリストへの忠実」にしても「人を育てる」ことにしても、その根本はキリストの命から出てきます。キリストの命に預かって、キリストの命に押し出されて献身的に働く。そのような真実から出てきます。キリストの命は私たちを生かす力ではありません。人は如何に生きるべきなのか、人を育てるとは何なのかをも示しています。ですから、キリストへの忠実が何であるかを教え、情熱をもって人を育てる教育事業へと私たちを押し出

していきます。だから固く信仰に立って、キリストからいつも命を頂いて、中心にあって西南学院の教育の業に従事している。そういう一群れの人たちが何時も学院におられて、そういった人たちが学院の教職員から尊敬を受けている。そういうことが西南学院にとって大切であろうと考えます。

しかしながら、西南学院が全体として伝統を継承していくことは、一群れの人たちだけではできません。そこで第2に、キリスト者以外の教職員を同労者とする精神的雰囲気が必要になります。幸いなことに西南学院は、キリスト者ではないけれども、西南学院の伝統を尊重し協力して下さる多くの同労者に恵まれています。こういった人たちと共に西南学院の伝統を受け止め、それを継承していくことが大切です。

第3にすべての教職員を尊敬し、それらの人が持ち場で働いておられることに何時も期待し続けることが大切です。教員の場合ですけれども、教員の中には明らかにキリスト教教育に批判的な人たちがいます。批判的だけれども、それぞれの責任を負って彼らの勤めは誠実に果しておられる。こういう人々を同労者として大切にするのは、違いを包み込んでいく大きさが、西南学院には必要です。同労者として彼等の働きに敬意を表しつつ共に歩む。そういう大きさがあって初めて西南学院の良き伝統は全体の底流として流れ続けていきます。

おわりに 近未来の西南学院の可能性

最後に「近未来の西南学院の可能性」について述べます。総論で「与える幸い」に触れました。人を生かすために与える。人に期待し育てるために与える。「何故、与えることが幸いなのか」という問いの答えは自明ではありません。しかし、「人を生かすために与える時に人は本当に生きる」ことを真実として知らされています。だから、「与える人は幸い」なのです。この真実は西南学院においても適用されます。学生に与え、学生が生きることがするために与える。地域を活性化し、地域がふさわしい社会を形成していくために必要なも

のを西南学院が与える。そのように与え、与え続けている時に、学生と共に地域社会において西南学院は生きることができます。そのようにして西南学院が生きる時に、西南学院に勤めている私たちもいささかの責任を担うことによって生きることができます。人は他者を生かすことによって、本人も生きることができるからです。

与えることによって生きる。そこで西南学院は何を与えることができるのかという問いは真剣な課題となります。2つの側面からこの課題を考え、求めるべきであろうと考えます。

一つは西南学院の伝統とその伝統によって西南学院が今持っている能力です。もう一つは学生の必要と地域社会の必要です。これら2つのものを組み合わせたところから、西南学院は一体何を学生と地域社会に与えることができるのかは見えてきます。それは西南学院の真剣な課題であり、祈りであり、追求すべきものです。そういった課題を追求していく中で、西南学院のキャンパスにおいて与え育てていく働きを続けていくことができます。その時には私たちが西南学院で働いている日々は決して虚しくはならないのです。教職員にとっても西南学院で働いている日々は本当によかった、素晴らしかった、輝いていた、そういった時となります。あるいは西南学院における日々をそういった時とするために力と祈りを合わせていきたいと願います。